

中国陶磁の名品が横浜へ

横浜ユーラシア文化館 2018 年度企画展

早稲田大学會津八一記念博物館開館 20 周年・横浜ユーラシア文化館開館 15 周年記念企画

博士の愛した中国陶磁 一美と技の 5000 年一



さんさいらくた だていよう
三彩駱駝・駝丁俑 (唐 7～8 世紀) 早稲田大学會津八一記念博物館 (會津ハーコレクション)

サイズ：駱駝 (高さ：68.1cm)、駝丁俑 (高さ：61.3cm)

【開催趣旨】

横浜ユーラシア文化館開館 15 周年を記念し、同じ年に開館 20 周年を迎える早稲田大学會津八一記念博物館との共催事業として、両館が所蔵する中国陶磁およそ 70 点を紹介する企画展を開催します。中国歴代の名品が一堂に会する、横浜市内では近年希な展覧会です。

両館の特徴は、ともに研究者が収集した資料を収蔵する点にあります。早稲田大学會津八一記念博物館は、美術史の研究者であり書家・歌人としても著名な會津八一の収集資料を中心として開館しました。横浜ユーラシア文化館の核となる収蔵品は、東洋史学者であり歴史学を越えて広く人類史をテーマとした江上波夫の収集によるものです。ともに大学に籍を置いて研究と教育に携わった二人の博学の士が、その学問的関心と教育的な観点から収集した陶磁器類には、古美術品のコレクターとはまた異なるまなざしを感じられます。

會津八一と江上波夫の収集資料に、富岡重憲コレクション (旧富岡美術館収蔵品) の優品を加えて、博士達の愛した中国陶磁の数々を通して、新石器時代後期から近代まで 5000 年にわたる陶磁器の変遷を展観し、その美と技をご堪能いただきます。

【展示の見どころ】

■陶磁器の歴史を凝縮！

新石器時代の彩陶の流れるような幾何学紋様、漢代の緑釉、唐の三彩、金から明代の磁州窯の鉄絵、日本でも茶器として人気の高い天目茶碗、世界でもてはやされた龍泉窯の青磁や景德鎮の青花、そして明や清の華やかな五彩などが時代順にならび、展示室を一巡すれば、およそ 5000 年にわたる中国陶磁器の変遷が実感できます。

■中国だけじゃない！ 中国陶磁に見るユーラシア世界の広がり

展示されるのはすべて中国製ですが、そこには異国の要素も垣間見えます。例えば、西アジアや中央アジアと中国との東西交易を担ったのは駱駝です。三彩の駱駝と、漢民族とは異なる風貌の駝丁には、シルクロードを様々な文物が行き交った唐代ならではの異国情緒が感じられます。また、明代の大皿には、アラビア文字が書かれています。イスラーム圏への輸出用と考えられ、ユーラシアの広い交流を物語ります。

■容器だけじゃない！ 副葬品一死後の世界

この度の企画展では、明器といわれる副葬品もご紹介します。明器は、亡くなった人が死後の世界でも豊かに暮らせるように墓の中に納められたもので、人、家畜、家財道具などを象ったものや、墓を守る役割をする鎮墓獣などがあり、当時の人々の日常や世界観がうかがわれます。會津八一は、教育資料として明器を系統的に収集しており、江上や富岡のコレクションにも類例が見られます。

■博士達の愛した逸品！ 比較の面白さ

會津、江上、富岡すべてのコレクションに見られるのが白釉を施した龍耳瓶です。装飾性豊かで実用品と言うよりは、墓に納めるための明器と考えられています。中国らしい龍の形の把手（耳）を持ちながら、西アジアやギリシア、ローマなど地中海世界で長く使われたアンフォラという容器に通じる形をしており、唐代中国の陶磁器に西方の影響が及んだ一例とされ、旧蔵者達はそのコレクションに龍耳瓶を加えた理由がうかがわれます。

3 点の中で最も大きく堂々とした印象を与えるのは江上旧蔵品ですが、把手の龍頭部の配置が近すぎ、明器とはいえ使いにくい形をしています。一方、富岡旧蔵品は細部の作りが繊細で把手の配置も自然です。會津旧蔵品は両者の中間といえるでしょう。

他にも、馬俑頭部、皮囊壺、陶枕など、複数のコレクションに見られる作品があります。それらを比較してみるのもこの企画展ならではの楽しみ方です。



龍耳瓶 唐 7～8 世紀

横浜ユーラシア文化館（江上波夫コレクション）



彩陶鉢 新石器時代 紀元前4千年紀後葉～前3千年紀前葉
横浜ユーラシア文化館（江上波夫コレクション）



白地鉄絵龍鳳文四耳壺 元 14 世紀
早稲田大学會津八一記念博物館（富岡重憲コレクション）



青花宝相華唐草文双耳瓶 明 正徳年間（1506～1521）
早稲田大学會津八一記念博物館（富岡重憲コレクション）



五彩婦人図盤 明 嘉靖年間（1522～1566）頃 国指定重要美術品
早稲田大学會津八一記念博物館（富岡重憲コレクション）

■會津八一（あいづ やいち、1881～1956）

新潟市生まれ。書家・歌人としても知られる。早稲田大学英文科卒業後、中学校等で教鞭を執る傍ら独学で東洋美術史を修める。50 歳で早稲田大学教授となり 53 歳で博士号取得、同大に東洋美術史研究室を開設する。早稲田大学會津八一記念博物館は、會津が研究および教育資料として収集したコレクションを中心に 1998 年に設立された。

■江上波夫（えがみ なみお、1906～2002）

下関市に生まれ、間もなく東京へ。東京帝国大学東洋史学科卒業後、北京に留学してモンゴル高原を踏査。戦後は東京大学教授として海外の遺跡調査などに携わりながら人類史という壮大な研究テーマに取り組む。横浜ユーラシア文化館は、1996 年と 1998 年に江上が横浜市に寄贈した研究資料を核として、2003 年に開館した。

■富岡重憲コレクション

新潟県糸魚川市出身の日本重化学工業株式会社初代社長富岡重憲（とみおか しげのり、1896～1979）収集の東洋陶磁と近世禅書画を柱とするコレクション。富岡の自宅を改修して 1979 年に開館した東京都大田区の富岡美術館の閉館に伴い、2004 年、早稲田大学會津八一記念博物館へ同コレクション 900 点余りが寄贈された。

【開催期間】

2019年1月19日（土）～3月31日（日） 72日間（内開館日数62日）

【会場】

横浜ユーラシア文化館 3階企画展示室、2階常設展示室（一部）

【入館料】

一般300円、小・中学生150円

【主催・共催 ほか】

主催：横浜ユーラシア文化館、早稲田大学會津八一記念博物館 共催：横浜市教育委員会

後援：朝日新聞横浜総局、神奈川新聞社、東京新聞横浜支局、毎日新聞横浜支局、読売新聞横浜支局、NHK 横浜放送局、TVK

【関連企画】

（1）ギャラリートーク 30分程度

1月20日（日）、2月17日（日）、3月21日（木・祝）、3月31日（日）

参加費 観覧料のみ

（2）記念講演会「東部ユーラシアの中の日本—文物の交流にみる—」

主催：横浜ユーラシア文化館、早稲田大学會津八一記念博物館

後援：関東学院大学

講師：李成市（早稲田大学教授）、鈴木靖民（横浜市歴史博物館館長）

日時：2019年2月10日（日）14:00～16:00（開場 13:30）

会場：KGU 関内メディアセンター M-803 講義室

横浜市中区太田町 2-23 横浜メディア・ビジネスセンター8階

受講料：500円

定員：120名（事前申込制、申込多数の場合は抽選）

申込方法：往復ハガキまたはホームページから

申込締切：2019年1月26日（土）

※受講者は講演会当日に限り受講票で企画展観覧可

（3）ワークショップ

①お気に入りは何？

展示室でお気に入りの作品をスケッチ。中国陶磁のデザインに挑戦！

期間：2019年1月19日（土）～3月31日（日）

参加費：企画展観覧料のみ

②美術記者にチャレンジ！ 共催：ニュースパーク（日本新聞博物館）

企画展「博士の愛した中国陶磁」の感想を新聞にしよう！

日時：2月、3月の土曜日、日曜日、祝日（3/9、3/10を除く） 9:30～16:00

会場：企画展会場、ニュースパーク

参加費：企画展観覧料の他、ニュースパークの入館料（小・中学生無料）が必要です。

（4）横浜中華街春節写真展 薬袋勝代氏撮影

期間：2019年1月19日（土）～3月31日（日）

会場：1階ギャラリー、旧第一玄関

観覧料：無料

お問合せ先

横浜ユーラシア文化館

畠山 禎（展示）、神谷 量子（広報）

Tel 045-663-2424

伊藤 泉美（副館長）

Tel 045-663-2465